

断罪後の悪役令嬢に転生したので

家事に精を出します。

え、野獣に嫁とつがされたのに魔法が解けるんですか？

ベルン
野獣の姿

◆セリーヌ
元・凄腕ハウスキーパーな
転生悪役令嬢。
家事が大好きで
明るく前向きに
公爵邸の環境を整える。

ベルン
人間の姿

◆ベルン
早くして家族を失くし
呪いで野獣の姿となった公爵。
多才で優秀だが、
人との関わりを絶っている。

◆エルディオ

セリーヌの元婚約者で
王太子。セリーヌを
断罪し、アイリと新たに
婚約したが……

◆アイリ

エルディオの現・婚約者で聖女。
セリーヌと同じ転生者で、
何か思惑がある様子。

◆アルト

セリーヌの幼馴染で
王家に忠実な騎士。

◆ユリア

エルディオの姉で
第二王女。

◆セルゲイ

セリーヌの賢い兄。
兄妹仲はよかったはずなのに
魔法にかかったように
妹に冷たくしていた。

Characters

第一章 隠しヒーロールートですか？

遠くで轟いていた雷鳴が徐々に近づいてくる。それにつれ、意識が鮮明になっていく。

初めに目に入ったのは、ほつれてボロボロになったドレスの裾だ。

白い薔薇の装飾が美しい紫色のドレスは、質がいいけれど何日も着ていたように汚れている。

「ここは……私は一体……」

先ほどまでスクランブル交差点にいたはずだ。眩しいライトの光と鈍い衝撃……そのあとの記憶がない。

「これは、悪役令嬢セリーヌ・リオーナが断罪される場面で着ているドレス……？」

悪役令嬢セリーヌは、私が夢中になってプレイしていた乙女ゲーム『月の記憶のラビリンス』の登場人物だ。

「どうして私が悪役令嬢のドレスを着ているの？」

しかし私の思考は、背中を乱暴に押されたことで中断した。

驚いて振り返ると、そこにいたのは目が覚めるような美貌の男性だった。

彼は鋭い視線を私に向けながら口を開く。

「どうした、今さら怯えてももう遅い」

「お兄様……？」

臍^{はらけ}に残る記憶を頼りにそう呼んでみたけれど、正直なところ彼のことを兄とは思えない。特徴的な青い髪と瞳に、切れ長の目をした彼は悪役令嬢の兄セルゲイ・リオーナだ。

どうも事故に遭う直前までの記憶と、この世界での悪役令嬢セリーヌの記憶が混在しているらしい。

そのとき、再び激しい音を伴いながら紫色の光を帯びた雷鳴^{てんぐ}が轟いた。不思議なことに雷は洋館に引き寄せられるように落ちていく。

「このお屋敷、見たことあるわ」

（間違いない。これはようやくクリアした逆ハーレムルートのエンディングのあと解放されたシナリオのオープンングに出てきたお屋敷だわ）

全てのヒーロールートと逆ハーレムルートクリア後に追加されるシナリオには、隠しヒーローが登場するらしい。そんな噂^{うわさ}が『月の記憶のラビリンス』のヘビィユーザーの間でまことしやかに囁^{ささや}かれていた。

しかし私は隠しヒーロールートをプレイすることを楽しみに帰宅している最中に、事故に遭ってしまったのだ。

記憶をたどれば『月の記憶のラビリンス』でシナリオの終盤に繰り返される悪役令嬢の断罪シーンが脳裏に浮かぶ……

『セリーヌ・リオーナ公爵令嬢！ 君との婚約は破棄する！』

卒業式にはメインキャラクターたちが勢揃いしていた。

私を断罪するのは王太子エルディオ殿下、その腕に縋^{すが}るヒロイン、アイリ・カレント男爵令嬢。エルディオ殿下の後ろに立つのは来賓^{らいひん}として訪れていたはずの兄セルゲイ・リオーナ公爵令息、そして騎士団長の息子であるアルト・レイウィル伯爵令息だった。……ゲームの中の一場面に思えるが、この世界の記憶と照らし合わせると全て実際に我が身に起こったことだ。

（——間違いない、ここは乙女ゲーム『月の記憶のラビリンス』の世界だわ）

『月の記憶のラビリンス』——略して『月ラビ』は、男爵令嬢であるヒロインが勇者の末裔^{まご}である攻略対象者たちを魔王の呪いから救う物語だ。

かつて勇者一行が魔王から受けた呪い……攻略対象者たちは、先祖の能力を受け継いでいると共に呪いをその身に宿している。

ヒロインは彼らの呪いを解き——そして彼らと恋を育^{はぐ}むのだ。

（ヒロインの周りには攻略対象者たちが勢揃いしていた……つまり、逆ハーレムエンドのエンディング目前だったということよね）

全てのヒーローを攻略してエンディングを迎えると全員とのハッピーエンドを目指すシナリオが解放される。

そこまで考えたあと、私はもう一度この世界のお兄様に視線を向けた。

「お兄様、このお屋敷は一体……？」

「ここはお前の新しい婚約者である野獣公爵の館だ。お前は未来の王妃殿下に数々の無礼を働いてエルディオ殿下に婚約破棄された」

「野獣公爵……？」

『月ラビ』の攻略対象者たちが受けている呪いには、姿形を変えてしまう類たぐいのものはなかったはずだ。不思議に思って首を傾げていると、お兄様が苛立いらだつたように再び口を開いた。

「ここに向かう直前に説明されただろう？ 恐怖のあまり忘れてしまったのか」

しかし、断罪されて野獣公爵にひどい目に遭わされるかもしれない妹に対しあまりに冷たい。この時点で私のお兄様に対する印象は最低になった。

その時、正面のドアが重々しい音を立てて開いた。

「……ほら、さっさと中に入れ」

「え、ええ……」

お兄様との記憶は臃気おぼろげだ。けれど幼い頃、私たちは仲がいい兄妹だったという記憶だけは残っている。

（思い出した……家からも勘当かんどうされているのね。ではお兄様と会えるのはこれが最後になるかも）少し寂しく思いながら、私は優雅に礼をして微笑む。

「どうかお元気で……」

一瞬だけお兄様が、「セリーヌ？」と呟いて、我に返ったみたいに目を見開いた気がした。

（でもきつと、気のせいよね……）

呆然と立ち尽くすお兄様を置いて、勇気を出して正門をくぐる。

そこには老齡の執事が一人いた。

「おや、いらしたのはあなた様だけですか？ リオーヌ公爵令息と一緒にいらつしやると伺っていたのですが」

「はい……ここまで送ってくれましたが、中には入らず帰ってしまいました」

「なるほど……失礼いたしました。フェンディス公爵家の執事、セバスチャンと申します」

「セバスチャン!!」

私のイメージする老齡の執事にぴったりの名前に、テンションが否応いやおうなく上がってしまう。

「……ええ？」

「いいえ、なんでもないわ。これからよろしくね？」

「ええ、こちらこそよろしく願いました」

大好きだった『月ラビ』の世界にいることに、少しでもワクワクしてしまっているのは事実。

そして、この後どんな展開が待っているのかと恐れおのいているのも事実。

（もし、断罪前に転生できていたらもっと自由にこの世界を楽しめたのかしら）

——『月ラビ』は一応残酷表現なしだから、拷問ごうもんされるようなひどい目に遭うことはないはずだし、流血騒けつちやうぎもないはずだ。

けれどこの洋館で何が起るのか、それが明らかになる前に私はこの世界に来てしまった。

(やっぱり実装されると噂^{うわさ}されていた、隠しヒーロールート?)

そう、私は隠しヒーロールートがあるのではないかとワクワクしながら家路を急いでいたのだ。しかし、家にたどり着くことはできず、今に至る。

これから何が起こるのか、と周囲を注意深く観察する。

長い廊下の窓には暗幕のようなカーテン。薄暗いからどれくらい汚れているか判別できないけれど妙にほこりっぽい……

「セリーヌ様？」

「はっ、はい！」

「セリーヌ様のお部屋はこちらです」

「私の……部屋？」

セバスチャンが扉を開く。てっきり案内された場所にフェンデイス公爵がいるのかと思っていたのに、そこには誰もいなかった。

「えーと、フェンデイス公爵はどちらにいらつしやるのですか？」

「旦那様は人前に姿を現すのがお嫌いですから」

ということ、よほどのワケありなのだろう。

「フェンデイス公爵に会えないとなると……私は一体何をすればいいのでしょうか？」

「セリーヌ様の望む通りになさってください。では、御用の際にはそちらのベルを鳴らしていただくようお願いいたします」

「お屋敷の中では、自由にしていいのですか？」

悪役令嬢の断罪後の生活だ。厳しく制限されても全く不思議ではない。

幸いなことに案内された部屋は、人の手が入り整えられているけれど……

「ご自由にお過ごしください。ただ、西の端にある金色のドアノブがついた扉は、旦那様の執務室ですので開けないようお願いいたします」

「はい！ わかりました！ とところで、メイドはいないのですか？ あとフェンデイス公爵のご家族とか」

「フェンデイス家には旦那様お一人しかおられません。旦那様は他者と交流することを極端に嫌うお方です」

「誰ともお会いにならないと？」

「ええ……旦那様が執務室から出てくることはございません。ですから、興味本位で覗こうなどとは思われませんよう……」

勇者一行により魔王が討伐されたあとを描くこの世界には、吸血鬼もいれば不思議な生き物だつてたくさんいるはずだ。それにもかかわらず見た目のせいで部屋からも出てこないとは、フェンデイス公爵は一体どんな姿をしているのだろう。

(でも、ハウスキーパーをしていたときだつて様々な依頼主がいたわ。だから不思議な決まり事には慣れているし……もちろん招かれざる婚約者にもかかわらず置いてくださるというのだもの。その家の主人の意向に沿うのは当然のことよね)

「承知いたしました。では、とりあえず、ぞうきんとバケツをくださいますか？　できれば、ほうきと塵取りも、あとタライとロープがあると助かります」

「は……？　他に質問はされないのですか？　それに使用人が使うようなものを一体なぜ」

「ええ、質問はいたしません。それから、置いていただく感謝を込めて、このお屋敷を整えさせていただきたいのです」

見たところ、洋館の造りは重厚で豪華だ。使われている素材も素晴らしい。

ほこりっぽい光が遮られていて全体的に暗く思えるけれど、少し手を加えれば素敵に生まれ変わるに違いない。

「——セリーヌ様、しかし公爵令嬢であるあなた様にそのようなことをさせるわけには……」

「どうぞ、私にお任せください！　このお屋敷を生まれ変わらせてご覧に入れます」

「え……？　それは一体どういうことでしょうか？」

「私、家事は得意なんです！」

「リオーヌ公爵令嬢が……家事!?」

そう、何を隠そう私の前世はカリスマハウスキーパーだ。

お料理、掃除に洗濯、お部屋の模様替えまでお手のもの。実は著名人からも指名が入るほど人気だったのだ。

誰もいないなら好都合！　この陰気な館を生まれ変わらせてみせよう。

しばらくの間、啞然とした表情をしていたセバスチャンは、気持ちを切り替えたのか私に一礼した。

「少々お待ちください。すぐにご用意いたします」

「ありがとうございます」

幸いにも、フェンデイス公爵がいる執務室の扉さえ開けなければ自由にしていらしい。

（まずはお屋敷全体を確認しないとね！）

私は早速部屋を出て、お屋敷を探検することにしたのだった。

用意された部屋は、日当たりのいい角部屋だ。

部屋から出て長い廊下の窓に下げられたカーテンに触れる。

カーテンは分厚く日の光を完全に遮ってしまっている上に、長い間洗濯されていないようだ。ひどく汚れてほこりっぽい。

カーテンを開くと、先ほどの雷が嘘のように空は晴れ渡っていた。

「そうね、カーテンのお洗濯から始めましょうー」

カーテンを外すのに難儀していると、セバスチャンが台を運んできて、ささっと外してくれた。「これをどうなさるのですか？」

「ほこりまみれなので洗って干します。今日だけで全部は無理なので、まずはフェンデイス公爵の執務室前の廊下だけでも……」

「……あなた様は一体」

セバスチャンの疑問はもつともだ……自分の手を見つめてみても、真っ白かつフワフワで家事一

つしたことがなさそうだ。

それでも悪役令嬢セリーヌは家事をするのに最高の力を持っている。

「実は私、全属性の魔法が使えるのです。もちろん一つ一つは弱いものですが、家事に役立つと思いませんか？」

「全属性……まさか。いや、リオーナ公爵家は聖女様の末裔……聖女様も全属性の魔法を使うことができたと伝えられておりましたな」

「そういえば、そういう設定でしたね」

「設定……？」

「あつ、なんでもありませんわ」

この世界の魔法には属性がある。そしてセバスチャンの言う通り、リオーナ公爵家は聖女の末裔という設定だ。そこに生まれた私も火・水・風・土の四属性、そして希少な光と闇属性の魔力を持っている。

「ほら、この通り全ての魔法が使えます」

火の魔法は赤、水の魔法は青、風の魔法は緑、そして土の魔法は黄色の光だ。

光魔法は金の光で闇魔法は黒い光……しかしこの二つの属性はとも希少でおいそれと見せていいものではない……リオーナ公爵家ではそう教えられてきた。

セバスチャンはしばし息を詰めたように動きを止め、色とりどりの魔法を生み出す私の指先を見つめる。

そして、愉快そうに口の端を上げた。

「実は、この屋敷の使用人は私一人です……屋敷の管理に手が行き届いていないことを憂いておりました。どうかお力をお貸しください」

「もちろんです！」

きつとセバスチャンは変わった令嬢が来たと思いつつも、私に合わせることにしてくれたのだろう。

（セリーヌの記憶をたどれば、魔法の使い方がちゃんとわかる。できそうだな）

外に出て大きなタライに魔法の力で水を張る。そして火魔法でほどよく温めてカーテンを沈める。風魔法を使えばクルクルとタライの中で洗濯物が回り出す。

けれど洗濯物を乾かそうともう一度風魔法を使ったら、水滴が勢いよく飛んできてずぶ濡れになってしまった。思ったよりも魔力の制御は難しいようだ。今度は細心の注意を払って火魔法、そしてそのあとに風魔法を使うと、温かい風が吹いてあつという間に洗濯物は乾いていった。

「……もしかして『月ラビ』と同じように二つの属性を組み合わせることができるの？」

前世の記憶を思い出すまでは、違う属性の魔法を組み合わせるなどという発想はなかった。私は嬉しくなって次々とカーテンを洗い、乾かしていった。

乾いたカーテンを抱えてお屋敷に戻ると、セバスチャンが目丸くした。

「まさか、こんなに早く洗い上がるとは……」

「ふふ！ 次はお掃除です」
掃除も魔法を使えば効率よくできるかもしれない。
新しいおもちゃを手に入れた子どものようにご機嫌になった私は、その日夜遅くまで家事に精を出したのだった。

* * *

目を覚ますとすでに日が高く昇っていた。
「寝過ごしてしまったわ……」

ここ数日、魔法を使つて家事をするのが楽しすぎて、遅くまで働いてしまった。
その間、この屋敷の主人であるフェンデイス公爵が現れることは一度もなかった。

（でも、時々視線を感じた気もするのよね）

かけてあったドレスを手にして着替える。裾はほつれたままだけれど、汚れは洗濯で落としたから着られないことはない。

着替えが終わると同時にドアがノックされた。

「はい……」

「セリーヌ様、商人が来ております。どうぞ応接間にいらしてください」

「商人……？」

セバスチャンの案内で応接間に行くと、怯えた様子の商人がいた。

もしかして、悪名高い令嬢と会うせいだろうか。

セバスチャンが口を開き、状況を説明してくれる。

「旦那様が、掃除をしてくださったお礼にと。好きなものを好きなだけ買うように仰っていました」
「えっ」

商人が用意した服は、どれも質の高いものばかりだった。

王宮の晩餐^{ばんさん}に出席できそうなものからティーパーティー向けのものまで、色とりどりのあらゆるドレスが並べられる。

「ありがとうございます。では、こちらを一枚……」

私が選んだのは、一番飾り付けが少なくて動きやすそうなワンピースだった。

「あの、セリーヌ様……全てを買い取つてもよいと旦那様は……」

「では、洗い替えにもう一枚頂くわ」

感謝しつつ、私は色違いをもう一枚買ってもらうことにした。

（それにしても質がいいわね……さすが公爵家）

記憶によれば私も公爵令嬢なのだが、前世の記憶の方が色濃いのだ。

紺色と黒のワンピースは白い襟^{えり}がついていてシンプルながら、素材がいいから長く着ることができそうだ。

「できればエプロンも欲しいのだけど？」

「え？ ……さすがにエプロンの取り扱いは」

「従業員のものを譲ってくれたらいいわ。お願い！」

そんな無理を言うと、商人はポカんと口を開けた。そして、緊張感がいくらか緩んだように見受けられた。

（呆れられてしまったみたいね。でも、エプロンはハウスキーパーの戦闘服。どうしても欲しい）セバスチャンは私という人間を理解し始めたのか、苦笑しているだけだった。

「かしこまりました……少々お待ちいただけますか？」

しばらく待っていると商人はフリルたっぷりのエプロンを手にして戻ってきた。

今までのボロボロのドレスから、上質なワンピースと商人の店の従業員のエプロンに着替える。ついでに髪の毛を三つ編みにしてみた。鏡の前でクルリと回ってみる。

（どこからどう見ても、メイドね！）

「商人さん、どうもありがとうございます」

「いいえ、今後ぜひお引き立てください」

動きにくいドレスから軽やかなワンピースに着替えた私は、今日は魔法を使ってどんな工夫をしようかとウキウキしながら働き始めたのだった。

しかし、その後もまだ見ぬフェンデイス公爵からの贈り物は毎日届けられた。

手荒れが気になると思えば香りのいいハンドクリームが……

日焼けが気になると思えばつばの広い素敵な帽子が……

ワンピースも色違いが増えていく。

（このお屋敷でひどい目に遭ったり、放置されたりすることを覚悟していたのに予想外の好待遇ね。それに贈られてくる品は欲しいと思ったものばかり……セバスチャンから報告を受けているのかしら）

お兄様は別れ際にここは野獣公爵の屋敷だと言っていた……心のこもった贈り物からして乱暴な人だなんて思えないから、もしかして大柄で毛むくじやらかな人なのかもしれない。

そんなことを考えつつ、執務室前の廊下に商人が持つてきてくれた淡いピンク色の花を飾る。

毎日、家事を頑張ったおかげで廊下は徐々に明るい印象になっている。

「今日は拭き掃除をしましょう」

廊下に敷かれていた絨毯は洗うために取り外している。

四つん這いでぞうきんがけをしていた私は、勢いをつけすぎて倒れてしまった。

運悪く花を飾っていた台にぶつかり、花瓶が落ちて割れる。

激しい音と共に、私は花瓶の水を被ってずぶ濡れになった。

「大丈夫か!？」

そのとき、慌てたような声と共に今まで閉ざされていた執務室の扉が勢いよく開く。

「は……」

目の前にいる人は、淡い緑色の瞳をしていた。

けれどその瞳は半分以上モフモフの淡い茶色の毛で隠れてしまっている。頭の上には柴犬の耳にも見える三角形の盛り上がり。その部分が毛なのか、それとも耳なのか、とても気になるところだ。

(巨大な犬のぬいぐるみみたい……それともゆるキャラの着ぐるみ?)

執務室から出てきたのだから、この人がフェンデイス公爵なのだろう。立場に相応しい服を着ているけれど、服から出ている手は顔と同じように毛で覆われていた。

(可愛い……これはあまりに可愛い)

なんとも形容しがたい可愛さに感激して震えていると、淡い緑色の瞳が逸らされた。

「はあ、すまない……そんなに震えるなんて、ずいぶん怯えさせてしまったようだ。すぐに部屋に戻るから泣かないでくれ」

よるけながら立ち上がった私は、ワンピースのスカート部分を握りしめた。

(違うの……この震えは怖いからではなくて)

「……モフモフ野獣公爵!!」

実は『月ラビ』では、呪いの話が出るとき呪いにより野獣に姿を変えた悲劇の公爵についても何度か話されていた。このため隠しヒーローは、悲劇の野獣公爵なのではないかと、モフモフ好きの私は期待していたのだ。

私のテンションは最高潮になっていた。隠しヒーローは野獣公爵と呼ばれるモフモフヒーローという線が濃厚だ。呪いで姿を変えられてしまったのだろうか……どんな物語が隠されているのか



ゲームをプレイして明かせなかったことが悔やまれる。

「野獣公爵と呼ばれているのは事実だが……モフモフ……とは？」

呆然とした響きが混じったその声は、低くて優しげで好感が持てる。

淡い緑色の瞳とぼちちり視線が合った。慌てて目を逸らそうとするフェンデイス公爵。仕草の一つ一つから私への気遣いを感じる。

（このお姿で私を怯えさせないために身を隠していたのかしら……でも、それよりも今気になるのは）

モフモフそんな毛並みが、パサパサと艶をなくしている。

手入れをすればきつと光り輝いて滑らかな手触りになるだろう。

それに最高級のペリドットみたいな瞳が毛並みで隠れてしまっているのも、とてももったいない。

「……その、さっさと着替えた方がいい。風邪を引かないように……怖がらせてすまなかったな」

私が凝視しているのを怖くて動けないと勘違いしたのだろうか。フェンデイス公爵は謝りながら扉を閉めようとした。

「待ってください、フェンデイス公爵！」

「ん……？」

「毛並みが悪くなっています！ 少しこちらにいらしてください！」

「え？ 毛並み？ え？」

「さあ、早く！」

こんなにも素敵な毛並みをお持ちなのに、生かさないなんてもったいない。

モフモフヒーローの出現にすっかりテンションが上がってしまった私は、その手を掴んでバスルームまで引つ張っていく。

「……俺が怖くないのか？」

フェンデイス公爵は戸惑ったまま抵抗することもなくついてくる。

「怖いなんてとんでもない。モフモフですよ、むしろご褒美です！」

「モフモフ……とは」

ファンタジー世界にあこがれを抱いていた私にとって、モフモフな公爵はむしろご褒美だ。『月ラビ』にもモフモフヒーローが実装されたいのに、と密かに運営のアンケートに書いていたくらいだ。

毛並みは艶を失ってぼさぼさだけれど一本一本の毛は細くて、きちんと手入れをすればモフモフ、フワフワになる予感がする。

「一緒にお風呂に入りませんか？」

「は？ ……何を言っている」

「お湯がちょうど沸いていますから！」

そのまま、飼い犬を洗う感覚でお風呂場にベルン様を引つ張っていく。すごく抵抗しているけれど、モフモフのためだ。私は負けない。

「ちよ！ うわあああ」

服を脱がせてモフモフの毛にお湯をかけるとべったんこになった。その毛並みを私に用意されていた最高級のシャンプーで洗う。もちろん私は服を着ている。

よく洗って、お湯をかけて、風魔法と火魔法を組み合わせて温風を出し毛並みを乾かす。実はここ最近、家事をしながら魔法を使ううちに、とうとう二種類の魔法を組み合わせて同時に使えるようになったのだ。ドライヤーのようでも便利だし、汎用性も高そうだ。

洗いがった毛並みをヘアオイルで整えながら丁寧にブラッシングする。

ライオンのたてがみのようにふさふさ、ふわふわの毛に包まれた理想のモフモフがここに完成した。

そこまで終わると、バスタオルで必死に体を隠そうとしていたフェンデイス公爵は、再び衣服を着て長いため息をついた。

「セリーヌは恥を知らないのか……」

「え？」

「この姿は俺にとって裸同然なのだが」

フェンデイス公爵がゴニョゴニョと何か言っているが、口もつていて聞き取りづらい。

（そういえばフェンデイス公爵に初めて名前と呼ばれたわ？ 意外にドキドキするものね？）

目の前のフェンデイス公爵からは、いい香りが漂ってくる。そのことに満足しつつ、私は口を開いた。

「フェンデイス公爵。いつも、素敵な贈り物をありがとうございます」

「つまらないものばかりだが」

「いいえ、心のこもった贈り物ばかりでとても嬉しかったです」

「君が喜んでくれたなら選んだ甲斐があったというものだ……ところで、君は俺の婚約者としてここに来たんだ。今後、俺のことはベルンと呼んでくれないか？」

「かしこまりました——ベルン様」

距離が近づいたようで嬉しく思いながらその名を呼ぶと、ベルン様が微笑んだように思えた。

「ところで、贈り物を選んでくださったのはベルン様ご自身だったのですか？」

「セリーヌに選ばせようとすると、必要最低限のものしか選ばないから」

実際、何度か商人が品物を持って現れたけれど、本当に必要なものだけを買うようにしていた。

今までのセリーヌとしての記憶から考えるに、それは公爵家の次期夫人に相応しい行動とは言えないだろう。

「公爵家の次期夫人として、それではいけないということですね……」

確かに、表に出ていないとはいっても、一応フェンデイス公爵家の婚約者になったのだ。

あまり貧相な格好や持ち物では対外的に示しがない。

「ふ、夫人……？」

たぶん、毛並みで顔が覆われていなければ、真っ赤になっているのが見えるんじゃないかという声だった。

あまりの可愛さに、私は目の前のモフモフに抱きついた。

「最高です。モフモフ」

ためらいがちに抱き寄せられる。温かくてフワフワで至福の感触だ。

「……そういえば、家の中が明るくなったな。執務室の前に花を飾ってくれたのも……セリーヌか？」

「はい、贈り物のお礼にと思って。喜んでいただけましたか？」

「ああ……花は好きだ」

「ベルン様も、もつと部屋の外に出てらした方がいいですよ？ 今日夕食も腕によりをかけましたから」

「——は？ 最近食事が美味しいと思っていたら、セリーヌが作っていたのか？」

「もちろん私が作っていますよ？」

好きなだけ食材を使ってよくて、スパイスだってよりどりみどりの環境で料理するのは最高に気分がいい。

それに、厨房の設備だつてさすが公爵家、全てが魔石を使って動く一流のものだった。

夢のような料理空間を思い出して幸せな気分になる。

でもその前にこれだけはベルン様に言っておかなくてはいけない。

「お仕事が忙しくなるとほとんど食べない日もあったらしいですね。毛並みに悪いです。今後は許しません」

「え？ 健康じゃなくて毛並み？」

「ベルン様は、私の理想です。毛並みは大事にしてください」

「毛並みを……大事に……」

妙な沈黙が流れはしたが、その日からベルン様は毎日私と食事をするようになった。

* * *

今日もベルン様と一緒に昼ごはんを食べる。

ベルン様はいわゆる引きこもりだ。しかし、仕事をしていないわけではないらしい。

その証拠に、野獣公爵に治められた領地だと言われながらも、フェンディス公爵領はとても栄えている。

それにこの王国には王子が一人しかいないから、王家に連なる公爵家に生まれたベルン様は、王位継承権も持つはずだ。

（やっぱりベルン様は隠しヒーローなのかもしれないわね。可愛らしくて忘れそうになるけれど、ものすごくスペックが高いわ）

屋敷には、定期的に王宮からの使者や、ベルン様の手足として働く人間が訪れる。

その人たちに姿を見せることはなく、全て書面で指示をしているらしい。

ベルン様の意見で成立した法案も多々あるのだとか。その他に、図書館や魔術院など王都で有名な建物の設計までしたそうだ。

——特に目を見張るのが、手がけた魔道具の数々だ。

水を浄化する魔道具により疫病は激減し、火を使わずに部屋を暖める魔道具のおかげで今年の冬は凍死者がほとんど出なかった。他にも数え切れないほどの魔道具を手がけているという。

（まさかベルン様が、お世話になっていた快適魔道具の数々を発明していたなんて）
部屋の中にながら全てをこなしてきたベルン様……天才は存在していたのだ。

「――本当に外で食べる気か？」

そんな風に尊敬しかけていたベルン様が五度目の確認をしてきた。

ベルン様は頭がよくて礼儀正しくてとても素敵な人だ。

最近は食事も三食きちんと食べ、毛並みもツヤツヤになってきた。

けれど、ときどき自信がなくなってしまうし、彼には野獣公爵と呼ばれる以外にも問題がある。

「だって建物の外にもう三年以上出ていないなんてありえますか？」

「バルコニーには日光浴のため時々出ていた」

「それは私の中では屋内の認識です。こんなに広いお庭があるんですから、一緒に外で食べましょう」

「そう……だな」

同意してくれたにもかかわらず、正面玄関まできてベルン様は歩みを止めてしまった。

その手は強く握りしめられ、小刻みに震えている。

もしかしたら、外に出ることに強い不安があるのかもしれない。

精神的ストレスは、毛並みによくない。

「仕方がないですね。ほら、手を繋ぎましょう」

「え？」

構わず私は、ベルン様の手を掴む。

相変わらず指の先までモフモフで好感が持てる。

「一緒に外で食べたいです。私と行きましょう？」

すでに外には、食事の準備ができている。

セバスチャンに手伝ってもらって、テーブルや椅子、敷物だって用意してある。

今日の料理は、この前ベルン様が気に入ってくれたフルーツとクリームを挟んだ色とりどりのサンドイッチだ。

さらにはデザートもたくさん作ってあるし、もちろん紅茶も準備してある……完璧なピクニックだ。

「一緒に？」

少しでもベルン様が微笑んだように見えた。

毛並みは素敵だけれど、その表情がわからないのだけは少し不便だと思う。

「そうですよ？ 私に一人で食事させる気ですか？」

「そうだな……一人で食事するのは味気ないからな」

その瞬間、胸がズキリと痛んだ。

（だって、私が来るまでベルン様はずっと……）

一人で寂しく過ごしていたら、毛並みだって艶ツヤをなくしてしまうに決まっている。

暖かい日差しの中、ベルン様が屋敷の庭に踏み出した。

その歩みにはもう迷いが無い。

いつの間にか逆に私がエスコートされるみたいになっていた。

ベルン様が贈ってくれたフリルいっぱい白いワンピースの裾が、風をはらんでフンワリと膨らんだ。

まるで貴公子のようにエスコートし、しかも私のために椅子を引いて座るのを手伝ってくれた。

ハウスキーパーをしていた前世の記憶の方が強い私にとって、エスコートされるのは新鮮で照れくさい。

(……ベルン様は貴公子なのだわ)

そのことを認識した途端、私の中に今までとは違う感情が湧き上がってくる。

「さあ、どうぞセリーヌ」

「……さっきまであんなに出るのを渋っていたのに」

「俺を誘ったのはセリーヌだろう？ どうして顔を逸らすんだ」

「嬉しいです。でも、ちょっと恥ずかしくなっちゃってしまっただけ」

「なぜ……」

私の頬はきつと今赤く染まっているに違いない。

(急に格好いい姿を見せるなんてずいぶん。いつもはただの至高のモフモフなのに……)

……でも、ベルン様はフェンデイス公爵家で育ったのだ。

可愛らしいから忘れてしまいそうになるけれど、その地位に相応しい教育を受けているはず。

浮き立ってしまった気持ちをごまかすため、私は今日の料理について語ることにした。

「今日の料理、腕によりをかけて作っただけですよ」

「そうか。不思議だ……いつも以上に美味しそうに見えるな。それに、この間気に入ったと言ったフルーツのサンドイッチ……覚えていてくれたんだな」

「ベルン様が気に入ってくれた料理は全部メモしてあります。それに、ピクニックの食事はいつもより美味しく感じるものです」

そんなことを言いつつ、庭を見回す。私の手によって植えられた花々が咲き誇るまではあと少し時が必要だろう。

そのときを待ち遠しく感じながら、こんな風に食事をするのも楽しみの一つだ。

いつもよりさらに美味しく思えるサンドイッチをかじり、ベルン様に微笑みかける。

(……きつと今、ベルン様は微笑み返してくれている)

やっぱり大好きなモフモフだけど、ベルン様の表情が見えないことだけはとても残念だと、改めて思った。

* * *

ベルン様のお屋敷で過ごすようになってから一ヶ月が過ぎようとしていた。

来客を告げるベルの音……ベルン様はいいかわらず部屋に引きこもっているし、頼りのセバスチャンは王宮に至急届けなくてはいけない書簡があると言って出かけてしまっている。

フェンデイス公爵家には、セバスチャン以外に使用人がいない。

仕方がないので、私がお客様を出迎えることにした。

（それにしても、今日は誰も来る予定がなかったはずなのに……）

正面玄関を出ると、そこにはなぜか、思い詰めた表情をしたお兄様が一人で立っていた。彼は現在、転生してからの第一印象最低のお方だ。

今さらなんの用でここに来たのだろう。まだ何か言いがかりをつける気なのかと私は身構えた。

「セリーヌ……」

お兄様は急に私の前にかくりと膝をつく。

「ええ……どうなさったのですか、お兄様」

私の記憶の中のお兄様はブライドが高く、人前で膝をつくような人ではない。

（うん……ヒロインが現れるまでは、私にだけは頭が上がらない優しいお兄様だったわ）

「そんな格好をして……」

「え？」

疑問に思っていると、お兄様が絞り出すような声で話し始めた。

「もしや召使いみたいに働かされているのか？ 俺が悪かった……セリーヌの笑顔を最後に見たときに、魔法が解けたみたいに視界がはつきりした。どうして大事な妹の言うことを信じられなかつ

たのか、今となつてはそれすらわからないんだ。どうか許してほしい……」

「——魔法が解けたみたいにい？」

『月ラビ』の攻略対象者たちは、誰もがヒロインであるアイリ・カレント男爵令嬢に好意を抱き、恋に落ちる。

そう……それこそまるで恋に落ちる魔法にかかっているのではと思うほど……

ゲームをしているときには疑問すら抱かなかったけれど、お兄様の言葉で、その不可思議さに思い至る。

そもそも、攻略対象者たちは皆、忠義に厚く、一時の感情に流されない人たちばかりだ。

『月ラビ』をプレイしているときには当然のように思っていたけれど、そんな彼らが揃いも揃って自らの矜持（きんじ）を捨ててまでヒロインを愛するなんてあり得ない。

（まさか本当に魔法をかけられて？）

考え込んでいるとお兄様は立ち上がり、悲痛な表情を浮かべ歩み寄ってきた。

「そんな姿で働かされて……公爵家から正式に婚約解消の願いを出す。これからは俺が……」

「ところでお兄様、本日はゆっくりしていけるのですか？」

これは、早々に誤解を解いてしまわないと、ベルン様の立場がない。

こんなにも、毎日よくしていただいているのだから、私には誤解を解く責任がある。

「急にどうした？」

「時間、ないですか」

「夕方くらいまでであれば調整できるが……」

「では、少々お待ちください！」

私はお兄様を応接間に押し込む。

（フエンデイス公爵家がお客様をおもてなししないとされるのも嫌だわ……）

ベルン様に仕事の合間に食べてもらおうと思つて焼いておいたアップルパイと、最近お気に入り
の薔薇の花びらが浮かんだ紅茶をお兄様の目の前に置いた。

「よろしければ、そちらを召し上がりながらお待ちください！」

それから部屋に戻り、最近すっかり充実してきたクローゼットから一番豪華なドレスを選んだ。

（あら……でも、私一人で着るのは難しそうね）

いつものワンピースであれば問題ないが、ドレスを着るには人手が必要だ。

悩んでいると、丁度セバスチャンが帰ってきた。彼は、私に視線を向けるや笑みを浮かべ話しかけてくる。

「セリーヌ様、お客様がいらつしたのですね」

「ええ、お兄様がいらしているの。私の境遇を勘違いしているようなので、ドレスに着替えて誤解を解きたいのだけれど」

「かしこまりました。実は商人のハンネス殿が、侍女を紹介させてほしいと仰っていました。早速お願いしましょう」

「ええ、お願い」

ワンピースとエプロンを買つて以来、このお屋敷の出入りの商人になつているハンネスさん。確かに彼は、閑散としたこのお屋敷の様子を心配してくれていた。

彼が紹介する人なら信頼できるだろう。

私のためにベルン様が用意してくれたのは、宝石も、化粧品も全てが超一流の品。王侯貴族だつて、気軽には買えないものばかり。

それだけベルン様の資金は潤沢ということなのか。それとも、今までお金を使う場面がなかったから、ここぞとばかりに使っているのだろうか。

しばらくして、着付けの手伝いのために一人の女性が来てくれた。

その女性は素晴らしい腕で化粧をして、髪の毛を結い上げ、ドレスを着せてくれた。

「ありがとう……無理を言つてごめんなさい。あなた、お名前を教えてくださいさる？」

「もったいないお言葉です。アンネと申します」

「本当に助かったわ。アンネ、これからも助けてくれると嬉しいのだけれど……」

「私でよろしければよろこんでお手伝いいたします」

アンネは帰つてしまったけれど、今後もこういった場面があるならば、侍女の一人くらいは必要かもしれない。

悪役令嬢の婚約者となつた、野獣と言われている公爵のところに来てくれる奇恃な人だ。ハンネスさんの言う通り、そろそろ真剣に検討してもいいのかもしれない。

こうして私は久しぶりに——前世の記憶が蘇^{よみがえ}ってからは初めて貴族令嬢としてドレスアップした。

お兄様が待つ応接室に戻ると部屋に控えていたセバスチャンが、少しだけ眉尻を上げた。今まで庶民のような格好ばかりしていたから、私の完全武装に相当驚いたのだろう。

「お兄様……」

「えっ、セリーヌ？」

お兄様が目を見開く。ここで大切にされているのをわかってもらうには、言葉で伝えるよりも最高級の品々を身に着ける方が効果的という考えは間違っていないかったらしい。

「お兄様、これでわかっていただけましたか？ 先ほどの服は私の趣味のための作業着ですわ」

「確かに……王女殿下でもここまでのドレスや宝石をすぐに用意することはできないだろうな」

「わかっていただけてよかったです」

「それに誰よりもきれいだ。セリーヌ」

公爵家の令息というのは、自然に相手を褒めたりエスコートしたりするように教育を受けているのだろうか。実の妹にまでそんなことを自然と言えてしまえることに衝撃を受ける。

「ところで、このアップルパイ、絶品だな。使用人がいないと聞いて心配していたが、優秀な料理人はいるようだな」

空になったお皿を名残惜^{なごりお}しそうに眺めて、お兄様が呟^{ささや}く。

「このアップルパイは、私が作ったのですよ？」

私の言葉に、お兄様が心底意外そうな顔をした。

「え？ 料理なんてできたのか？」

「——あっ」

（公爵令嬢が料理なんかないのは当然のことよね。前世の記憶のせいで失念していたわ）

しかし、今さら取り消すのもおかしい話だ。

「……隠れた才能があったようです」

「そういえば、セリーヌは子ども時代にクッキーを焼いてくれたことがあったな……あれは炭のようだったが」

そう、それはお母様が生きていた頃の話だ。お母様は聖女のような人で、時々自分で子どもたちのためにお菓子を作ってくれた。

その思い出は、前世の記憶に霞^{かす}まず鮮明に覚えていた。

というよりも、悪役令嬢セリーヌとして過ごしてきた記憶は徐々にはっきりしてきている。

「焦^こげて炭のようになったクッキーのことは忘れてほしいです」

「どうして思い出せなかったのかわからないほど大事な思い出だ」

そう言ってお兄様は子どもの頃のように笑った。

「——セリーヌが悪女だなんて言われ続けることを俺は許さない。待っていてくれ、必ずセリーヌの冤罪^{えんざい}を晴らしてみせる」

「——お兄様、私は今とても幸せです。だから、お兄様が危ない橋を渡る必要はありません」

「それでは俺の気が済まない。いくら仲よく過ごした思い出が消えてしまっていたからと言って、お前を追いつめてしまったのは全て俺の責任だ」

「お兄様……」

「今度こそ守らせてくれ……セリーヌ」

ホカホカする心を不思議に思いながら、同時に何か恐ろしいことが起こりそうな寒気を感じる。お兄様を止めることができないまま、あの乙女ゲームの舞台に帰っていくその背中を見送った。

お兄様を見送って部屋に戻ると、ベルン様が所在なさに屏の前でうろろしていた。

「どうなさったのですか？ アップルパイを食べて待っていたのでは……」

「——帰るのか？」

「え？」

ベルン様の声は心もち低い。

いつもは大好きなモフモフの毛並み……

（でも、毛並みに隠されて表情が見えないから……不安になってしまう）

「帰るって？」

「今日まで一緒に過ごしていればわかる……セリーヌが婚約破棄をされるような真似をする悪女ではないと」

「ベルン様……」

「そのドレスも、宝石も思った通りとてもよく似合う。まさに気高く美しい公爵令嬢だ。セルゲイが迎えに来たのなら帰った方がいい。微力ながら俺も君の名誉を回復させるために力を貸すから」

「……私に、リオーナ公爵家に帰れと仰るのですか？」

ベルン様はそばに歩み寄り、私の肩にそつと手を置いた。

確かにお兄様は帰ってくるように言ってくれたけれど、ベルン様は止めてくれるのではないかと期待していたことに気がついてしまう。

もしかしたらベルン様は、私が来たことで穏やかな生活を壊されて迷惑に思っていたのかもしれない。

「あの、迷惑だったでしょうか」

「——迷惑？」

ベルン様が、そつと私の肩から手をどけた。

（今の聞き方はずるいよね……）

迷惑かと聞いたら『迷惑なんかじゃない』と答えるに決まっている。心の奥底でそんな風に考えていた自分がいた。

（だって私はもう知っている。ベルン様がとても優しい人なんだってことを……）

もちろん、フワフワでフカフカの毛並みが魅力的なのは事実だけれど、それよりも今はその優しさに心惹かれている。

「あ、今のはなしです。ごめんなさい……すぐ、出ていく準備をしますから」

「え？ なぜ泣いているんだ……」

「泣いてないです」

私はベルン様の横をすり抜けて、部屋の中に入る。

……どういう理由でこの世界に来てしまったかはわからないけれど、私は断罪された悪役令嬢なのだ。ベルン様にとって私は王家から婚約者として無理に押し付けられた迷惑な存在に違いない。ドレスを脱いで、いつものワンピースに着替える。

宝石を外して、化粧を落として、髪の毛もボニーテールに結び直した。

（最初に買っていたいたワンピースと、エプロンだけは貰っていくことにしよう……大丈夫、私の腕ならどんな場所でもハウスキーパーとして働いていける）

覚悟を決めてドアの外に出る。

なぜか、ベルン様は膝を抱えてうずくまるように座り込んでいた。

「あ……あの？」

「なぜ……いつもの格好に戻っている。なぜさっきのドレスのままリオーヌ公爵家に戻らないんだ」

「あの家にはもう戻りませんよ？ 勘当かんどうされた身ですから……」

「は……？ 帰ってこいとセルゲイに言われていただろう？ セバスチャンから聞いた……のに」

お兄様はああ言ってくれたけれど、私が帰ったら迷惑をかけてしまう。

それにこれまでの生活で、ベルン様がゲームの隠しヒーローなのではないかという考えは日に日

に強くなっている。

もしそうであれば、私はまた断罪してしまうのだろうか。

乙女ゲームの続きが始まったら……と思うと怖くて仕方ない。

ベルン様がゆらりと立ち上がり、私を見下ろす。

「では、どこに行くつもりだったんだ」

いつも穏やかなその声に、今は怒りがにじんでいるようだ。

（こんなことなら、もう少し時間が経ってからそつと出ていくんだった。さっきみたいな態度をとれば、優しいベルン様が心配することぐらいわかっていたのに）

「私の家事の腕はご存じでしょう？ 魔法も全属性使えます。……どこでも生きていきますよ」

「――帰る場所もなく、出て行こうとしていたのか」

「これ以上迷惑をかけられません……」

「迷惑なはずがない!!」

叫ぶようなその言葉の直後、毛並みに沈み込んでしまうほど強く抱きしめられていた。

「君のことを迷惑だなんて思うはずがない……ただ」

「ただ？」

「ドレスアップしたセリーヌは美しくて、野獣公爵なんて呼ばれる俺のそばにいるべき人ではない
と思ってしまったから……」

その言葉には、ベルン様の苦しみや諦めが込められているようだった。

私は、ベルン様の体をこぶしでぽかぽかと叩いた。

たぶん、毛皮に吸収されてしまつて威力なんてないだろう。

それでも、そうせずにはいられない。涙もポロポロこぼれて、艶のある毛並みを濡らしてぺたんにしていった。

しゃくり上げながらようやく口を開く。

「——ここに、いたいです」

「本当に？」

「ここにはだめですか」

「セリーヌがそう望むのなら」

ベルン様は『いてほしい』とは言つてくれなかった。

（それでも……ここにいたい）

私はいつの間にか、この空間が大好きになつていたみたいだ。

それに、ベルン様のことを好きになつてしまった。

私はようやく自分の気持ちに気がついたのだった。

* * *

あの日以降、お兄様はときどき屋敷を訪れるようになった。

「セリーヌ、今日もそのワンピースを着ているのか？」

「ドレスを着ていたら、家事ができません」

「家事なんて使用人に……いや、執事しかいないのだったな」

「そうです。ところで今日も一人でいらつしたのですか？ 危ないです」

周囲に隠れて来ているのだらう、お兄様は供も連れずにいつも一人来る。

（他の攻略対象者たちなら自分の身は自分で守れるでしょうけど……）

宰相候補であるお兄様は聖女の末裔（まつぐ）という設定だが、剣や魔法は苦手だったはずだ。

「リオーヌ公爵家からこまではそれほど距離じゃないから問題ない」

「お兄様には公爵家嫡男としての自覚はないのですか!？」

「……セリーヌにだけは言われたくない。お前、掃除や洗濯までしているらしいな？」

「うっ……」

公爵家の嫡男がそんな危険なことをしてはいけなさと論（さと）しても、のらりくらりとはぐらかされ、なぜか次もまた一人で来てしまう。

（私のことが心配だと言っているけれど、手作りのお菓子を嬉しそうに全部食べていくのよね……もしかして、お菓子目当てなのかしら）

お兄様は特にアップルパイがお気に入りだ。今日もすでに二切れ目を食べ終えて優雅に口を拭（ぬぐ）っている。

「さて、セリーヌの元気な姿も見たことだし、そろそろ帰るか」

「お兄様……お気をつけて」

「ああ……お前も気をつけろ。記憶を失っているのは俺だけではないようだ」

「え？」

「ベルン……妹を頼んだ」

振り返ると珍しいことにベルン様が部屋から出てきていた。

（人が訪れているときに部屋の外にいるなんて）

しかしベルン様の姿を見たお兄様は驚きもせず受け入れているようだ。

公爵家に生まれた年の近い二人は旧知の仲なのだろう。

「ああ……この命に代えても守るから心配するな」

「それはそれで気に入らないな。お前——命は大事にしろよ」

「その言葉、そっくりそのまま返す」

会話を終えて去っていくお兄様の背中を見送る。

「お兄様が危険なことをしているのではないかと心配です」

ため息交じりにそう呟くと、ベルン様が口を開いた。

「大丈夫だ。セルゲイを守るために魔法をかけておいた。少なくとも剣や攻撃魔法で傷つくことはない」

「え？ ベルン様も魔法が使えるのですか？」

「元々、我がフェンデイス公爵家は勇者と共に戦った魔術師の子孫だ」

「勇者の仲間の……子孫？」

やはりベルン様は『月ラビ』の攻略対象者に違いない。

『月ラビ』のヒロインは勇者の血を継いでいて、攻略対象者たちは全員が勇者と共に魔王を打ち倒した仲間の子孫なのだ。

かつて魔王討伐に成功した後、勇者と共に戦った王子は初代国王となった。

乙女ゲーム『月の記憶のラビリンズ』の攻略対象者たちは、勇者と共に戦った仲間たちの血を引いている。

リオーナ公爵家は聖女、フェンデイス公爵家は魔術師の血を引き王家に繋がる家門だ。

「聖女の血を引いているのに私が得意なのは闇魔法ですが……」

「光魔法を含め火、水、土、風、全属性の魔法が使えるじゃないか」

「闇魔法は人を呪うことしかできないから使い道がないですし……他の属性魔法は家事に役立つくらいしか使えません」

「確かに、セリーヌのイメージと闇魔法はかけ離れているな」

ベルン様はしばらく私のことを見つめながら、何か思案していた。

「セリーヌがドライヤーと呼んでいる魔法……もしかして火魔法と風魔法を組み合わせている？」

「ええ、ドライヤーは風と火魔法を組み合わせています。その他にもアイロンは水と火魔法、洗濯

「は水と風魔法を組み合わせていますね……」

「違う属性を組み合わせた複合魔法は、勇者の時代以降失われたはずの伝説の魔法だ。まさか家事に使われるなんて想像もつかなかったたからすぐに気がつかなかった」

呆れたような声を出したベルン様。たぶん表情も呆れ返っているのだろう。私はそう思うのだった。

その後ベルン様は、私が家事に魔法をどう利用しているか知りたいと言って、ずっと後をついてきている。

（ベルン様には確かに魔術師の血が流れているのね……魔法のことになった途端にこんなにも目を輝かせるなんて）

火魔法と水魔法を組み合わせさせてシャツのしわを伸ばしながら、好奇心を隠しきれない視線にため息をつく。

「なるほど……複雑に術式が組み合わさっているな。セリーヌはどうやって思いついた？」

「火魔法で洗濯物を温めたらしわが伸びたので、スチームもあればいいな……」と思っただけでした。ジュワジュワ、シューツツという感じです」

「魔法を感覚で捉えているのか……そうなると他人が理解するのは難しいかもしれないな」

「そんなに難しいことでしょうか？」

「理論で再現しようとするのが難しいが、見本があればできないこともない。勇者が使っていたという魔法を再現する研究も前進するだろう」

ベルン様が指先で二種類の魔法陣を描く。どちらの魔法陣も一瞬だけ青白い炎をまとい輝いた。けれど、魔法が発動されることはなく、すぐに光を失ってしまう。

「——これは研究の余地があるな」

頭を撫でられる……最近ベルン様は私のことを子ども扱いしてくる。

誰にもこんな風にされたことがないから、くすぐったくて照れくさく。

「それから、いつもこうやって働いてくれていたんだな。ありがとう、セリーヌ」

「えっ……!？」

モフモフの毛並みのせいで表情は見えないけれど、その声は柔らかく優しい。ベルン様はただ私の扱いが上手くなってきたという気がする。

「この家に使用人がいないのは俺の責任だ。だから手伝わしてくれ」

「公爵自ら家事だなんて……」

「それを言うなら、セリーヌも公爵令嬢で俺の婚約者じゃないか」

「そうでしたね」

元々器用なのだろう。少し説明すればベルン様はどんなことでも容易にマスターしていく。

このままでは凄腕のハウスキーパーがもう一人出来上がってしまいそうだ。

「そろそろ食事にするか」

「はい！ 少々お待ちください」

「いや、少しここで待っていてくれるか？」

ベルン様はそう言って姿を消し、しばらくすると両手に皿を持って戻ってきた。
「まさか、ベルン様が作ったのですか？」

「ベーコンを焼いてパンに挟んだだけの簡単なものだが……口に合うかな？」
記憶を取り戻してから、誰かが作ったものを食べるのは初めてだ。

（うん、前世でも天涯孤独で、誰かにご飯を作ってもらった記憶はない……）

「美味しいです……」

「そうか……喜んでもらえて嬉しいよ」

ベーコンが塩辛かったのは、涙が落ちてしまったからだろうか……

私はベルン様に気がつかれないようにそっと涙を拭^{ぬぐ}ったのだった。

* * *

次の日は魔石に二種類の魔力を込める実験をした。

「本来であれば、属性が違う魔力同士は混ざり合わないが、セリーヌの魔法では混ざっている。魔石に二種類の魔力を同時に込める実験をすることで、属性魔法を組み合わせる方法がわかるかもしれない」

「なるほど……難しくてよくわかりませんが、この魔石に二種類の魔力を込めればよいのですかね？」

「ああ、できそうか？」

「たぶん……シュワシュワグルグルという感じですれば……」

魔石に魔力を込めながら、泡立ってクルクル回る魔力を想像する。

透明の魔石が魔力を込めるたびに様々な色に変化するのは、理科の実験みたいでとても面白かった。

「きれいですね」

「無邪気なことだ。こんな芸当ができるとわかったら、国中の魔術師が押し寄せてくる」

「そうですね。でもこのことをご存じなのはベルン様だけですから問題ありません」

「はあ——危機感がない」

「ピンチになったらベルン様の魔法で守ってください」

「身を挺^{てい}してでも君を守ると決めているが……俺の体を見ればわかるだろう？ 絶対守れるという約束はできない……自衛してくれ」

「そうですね。命大事にですよ！ ベルン様」

「なぜ俺が心配される流れになっている？」

冗談めかして言うてはみたものの、本当は怖い。

（だって……私のために身を挺すなんて、やめてほしい）

公爵家令嬢として過ごしてきたセリーヌの記憶は、徐々にはっきりとしてきた。だから、この世界の常識もわかっている。

こんな力があると知られたなら、今みたいに穏やかに過ごすなんてできないだろう。

でも、もっと怖いのは自分のことだけじゃなくて――
チラリと視線を向ける。

淡い茶色の毛は長く、大型犬みたいに全身が覆われている。

野獣公爵と呼ばれているけれど、ベルン様は公爵家の令息としての教育を受けている。

『月ラビ』は、ヒロインと共に攻略対象者たちが呪いに立ち向かう物語だ。もしもベルン様が隠しヒーローなのだとすれば、この姿こそが立ち向かうべき呪いなのかもしれない。

運命に立ち向かう中、攻略対象者たちは数々の危険にさらされる。

ベルン様だって例外ではないだろう。

「……あの」

「なに？」

「本当に無理しないでくださいね？」

「俺は弱虫だ……そんな心配しなくても、危険なときは逃げる」

たぶん、本当に弱虫な人はそんなこと言わずに逃げると思う。

きつと、ベルン様はそういった場面では逃げない。

「では約束です」

「え？」

「危険なときは逃げると……約束してください」

「ああ……一緒に逃げよう」

ベルン様が、私のことを守るみたいにそつと抱きしめてくる。

暖かい毛のぬくもりと、高級シャンプーのいい香りが鼻を掠めていった。

* * *

半年が過ぎて、私たちの婚約準備期間は終わりを迎えようとしていた。

残念なことに、私たちの関係には進展がない。キスすらしていない。

お兄様からは祝いの手紙が届いた。今はそちらへ行くことはできない、と無念が伝わってきた。長文だった。いつの間にか、私とお兄様もずいぶん兄妹らしくなったものだ。

鏡に映った私は、白い薔薇をモチーフにした真っ白なドレスを身にまとっている。

紫色の髪は緩やかに巻かれ、少しきつく見える金茶の目は、柔らかなブラウンのアイシャドウで優しげに化粧された。

いつの間にか公爵家の御用達になった商人ハンネスさんが、着付けのための人材も用意してくれた。

それは、以前もお世話になったアンネだった。

「今日から正式にフェンデイス公爵家で侍女として勤めることになりました」

「嬉しいわ……アンネ」

「もったいないお言葉です」